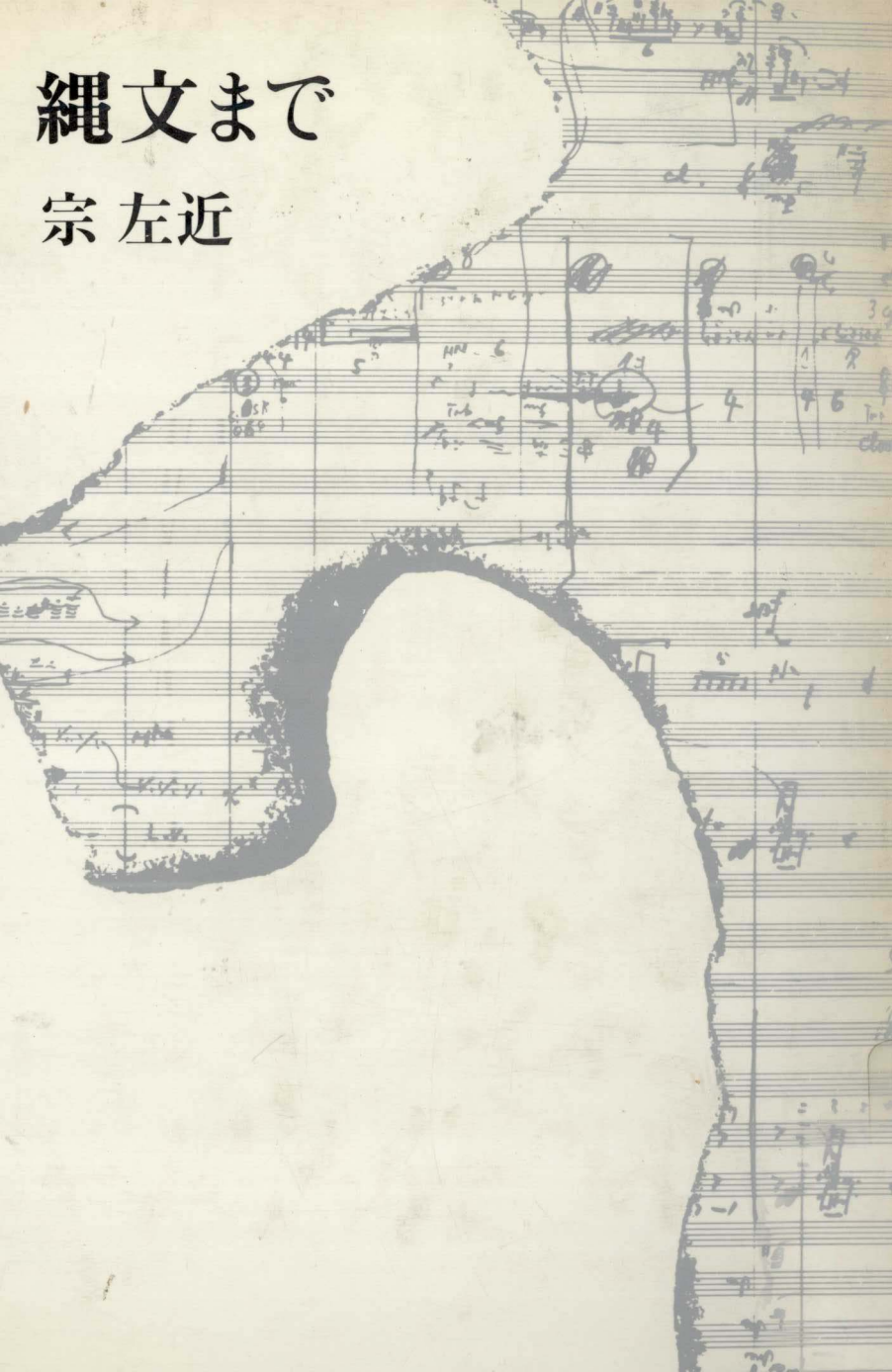
縄文まで

宗 左近



縄文まで

宗 左近

筑摩書房

縄文まで

1982年 8月25日　初版第1刷発行

著　者　宗左近
発行者　布川角左衛門
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2丁目8番地
郵便番号101-91　振替口座　東京 6-4123
電話　291-7651(営業)　294-6711(編集)
印　刷　厚徳社
製　本　積信堂

©1982 Sakon Sô　Printed in Japan

0091-81152-4604

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

縄文まで＊目次

I　春のぶらんこ

春のぶらんこ　5

希望のゆくえ　47

新年の手紙　86

天使のまなざし　102

II　江戸川の流れのほとりで

季節は空を渡るなり

桃の花　119

花の怖さ　121

真間山弘法寺　124

滝のぼり　125

水のうえ　127

季節は空を渡るなり　130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

高幡不動日記
宙空日録（Ⅰ）　134
宙空日録（Ⅱ）　137
宙空日録（Ⅲ）　141
バイバイ日録　144
二十五時　145
器の身の上
鳥のゆくえ　148
縄文に憑かれて　155
優しい風　158
江戸川の流れのほとりで
わが町　市川市市川南三丁目　163
見えない愛の……　166
天使の歌を　170

雲雀の歌　173
花鳥風月記　177
《瞳に愛を》日録　181
音楽と詩との出会い　186
縄文の夏　189
無衛　192
III　縄文まで
縄文まで——自伝抄　199
あとがき　243
付録　中野区立上鷺宮小学校校歌　i
船橋市立習志野台第二小学校校歌　iv
相模原市立中央中学校校歌　vii
松下政経塾塾歌　xi
中新田町町歌　xiv

縄文まで

I　春のぶらんこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

春のぶらんこ

昼間の電球

近頃の東京周辺の二月から三月にかけてのこの時節は、ゆっくり明滅する昼間の電球に似ている。冷やかに静もった肌を見せたままでいるときは、冬である。灯がともって肌がレモンいろに明るむときは、春である。その冬と春との変換が一時には終わらない。微妙に何度も行われて、光が明滅する。もっともこの時節のなかの春のまたたきは、そこが昼間の電球といいたいところで、あたりになまなましい鮮烈さで輝き出ることはない。

こういう二月から三月の時節の特性は、戦前戦中はもとより戦後十年あたりまでは無かったもののように思えてならない。これもやはり、高度成長の始まって以来の、ここ十数年来のことであろう。それ以前のこの頃には、大雪もどさどさ降ったし、霜柱もきびしく立ったし、道路に水も思いきりよく凍てついた。凜烈たる冬、という言葉がいかにもふさわしかった。自然の拒絶の意志が鋭く氷結していた。だからわたしたちは、ひたすら春の到来を待ちわびた。

しかし、いま、少なくとも東京周辺に関する限り、事情はすっかり昔と異なってしまった。世界中が、あの北の国スウェーデンまでが、ここのところ暖冬異変だという。だが、異変を生じたのは、冬

だけではないような気がする。春もまた、いち早く暖冬のなかで妙な具合に促成栽培されているのではなかろうか。そして、季節がそうであるならば、そのなかで縮んだり伸びたりしている生きものたちもまた、おそらく……。

ここ二、三年、淡い不安の靄に、わたしは閉じこめられてきている。自分自身の内側にいる生きもの（？）にどんな異変が生じているのか、のぞきこまなければならないような怯えを覚えている。だが、そういう作業は、辛気くさいし、だいいち少しも楽しくない。そこで、もっぱら外側を見る仕事に転向することにした。つまり、ここのところわたしは散歩にはげんできている。

ところで、散歩にはステッキがあったほうが、なにかと便利であろうと思われる。しかし、わたしごとき野暮天がそんなものを手にすると、子供は避けて通るし、犬は吠えたてて、どうも具合がよくない。したがって、ステッキのかわりに、俳句歳時記を懐にして近所をぶらつくことにしている。

東京都下の西部の日野市に高幡不動さまがあり、そこから多摩自然動物公園までが直線距離にしてほぼ一キロ。その一キロを底辺として正三角を東むきにつくっての頂点に、丘があって団地ができている。神信心の霊場と野獣の収容場と人間集団のねぐらという取りあわせは、それ自体何ごとかを暗示しているようで、ふと無気味でなくもないのだが、団地の住人であるわたしの散歩の足のよく伸びるのは、ほとんど団地内、それもまず小学校の校庭に限られている。

この校庭は谷をはさんで一方がお不動さまの森にむかいあい、もう一方が動物園の丘をのぞんで、それぞれが広い空をもっている。そして、昼休みや放課後しばらくの間は、この校庭には世の中の歯車の一つに組みいれられる前の人間、子供たちがいっぱいむらがって遊びたわむれている。ああ、こ

こには季節のなかにあって一番その異変を受けていないもの、風景の自然と人間の自然があるんだなあ。

——そんなことを思いながら、わたしは校庭の片隅にあるぶらんこの一つに乗って、静かに強く漕ぎはじめるのが好きである。

ぶらんこの前方には、校庭をへだてて鉄筋三階の校舎が立っている。その屋根の上には泥のついた葱みたいな薄青い空がのっている。そして、ぶらんこの背後の遠くには、雪化粧をして曇りガラスみたいな富士山が表情を失って立っている。ぶらんこは後退し前進し、往復しながら高くゆれてゆく。屋根の上の空の春と富士山の冬とが、昼間の電球みたいなわたしの放心のなかで次第に明滅して変換を開始するのである。

半仙戯

ステッキのかわりに俳句歳時記を携えて散歩に出るために、思わぬ知識の幾つかも身につけることとなった。たとえば山本健吉さんの編まれたものによると、「ぶらんこ」の項には、次のような説明がでている。

「学校や公園などに設けてあり、とくに春と限らないが、古来シナでは鞦韆（しゅうせん）と言って、春の戯れとしており、また伸びやかな春の遊戯としてふさわしい。ふらここ・ふらんど・ゆさはり・半仙戯」

読んで、教わることもあれば、空想にさそわれるくだりもあって、なかなか楽しい。

俳句の季語としては、ぶらんこは春ということになる。わたしなど、ここでまず、びっくりした。今まで何となく、ぶらんこは秋のものだという気がしていた。九月になって、さびれてしまった海水浴場のはずれの浜に、もう乗る人の影もないのに、一人でにかすかにゆれているぶらんこ。そんな映像が浮かんできていたせいかもしれない。それに、鞦韆という文字のなかに、秋があったためかもしれない。革で作った秋の往復運動をする道具、というふうに勝手に読みとっていた。しかし、同じく勝手に読みとるのなら、秋をこちらに引きよせたりあちらに推しやったりして遷す革で作った道具、むしろそういうように受けとっておくべきではなかったろうか。大きく漕いで中空に舞いあがったぶらんこの先の清涼感のなかには、たしかに秋がある。

ぶらんこの別称、ふらここ以下の名付けかたにも、わたしたちの先祖がはじめて「ぶらんこ」なる物体を前にしたときの実感と、名辞化に際しての苦心のほどが、あからさまにあらわれでていて、感心する。

「ぶらんこ」という名前は、バランコというポルトガル語に由来すると、ある辞典に出ていた。よくバランス（均衡）がとれている、などというときの英語のバランスに当たるものが、そのバランコである。しかし、ポルトガルのキリスト教の布教士たちが渡来する以前は、日本語で何と呼ばれていたのであろうか。ふらんど、これは外国種くさい。それなら、ふらここであろうか、ゆさはりであろうか、それとも……。

それはまあ、学者先生においおい御教示をいただくことにして、わたしはまだぶらんこに乗っていて「半仙戯」を楽しんでいることにしたい。

「半仙戯」とはまた、昔の中国の（だろうと思う）人はうまいことをいったものである。ぶらんこに乗ると、ほんとに誰もが、なかば仙境にいる。あるいは、いや同じことだが、なかば仙人になる。半分、憂き世の大地を離れて、中空、つまり天のなかばに入る。たぶん、どんな暗くて重い鬱屈を胸に抱く人も、ぶらんこに乗ってしばらくすると、胸のなかのものの支配をのがれて、何か別の世界にひきいれられてしまうのではなかろうか。ぶらんこに身をゆだねてなお物憂い表情をした人を、わたしは今まで見たことがない。

それにしても、山本さんのその歳時記のなかで、三橋鷹女の次の一句を読んでわたしは感嘆した。

鞦韆（ぶらんこ）は漕ぐべし愛は奪ふべし

ウーマンリブの人々も、（が、ではない）喜びそうな、強烈な、精気のみなぎっている、いい作品である。現代詩などでは、こうも端的に歌えはしない。いかにも俳句、と思う。わたしなど、とてもかなわない。わたしが書けば、次のどちらかになってしまいそうである。

鞦韆は漕ぐべからず愛は奪ふべし

鞦韆を漕ぐべくして愛は奪はれて

わたしのものが、こういう情けないものとなるのは、必ずしもわたしが馬齢を重ねた男性であるせ

いではない。半仙戯の魔力に魅惑され、それを尊重しているためである。もっとも、鷹女が夜の闇のなかでぶらんこを漕ぐというのだったら、話はまたおのずから別である。

闇にふる雪

遊園地などにゆくと、ジェット・コースターという遊び道具（？）がある。一台四人乗りの小さい箱（または、客車？）が十数台つながっていて、いったん発車してしまうと、線路はたちまち山となり、ふいに谷となり、落下するかと思えばまた急上昇し、あやうく眩暈の渦にのまれ、すんでのことに墜落する。ハラハラドキドキのごとき騒ぎでなく、キャーキャー、ヒーヒー、阿鼻叫喚のほどまったくすさまじい。

これもまた大地を離れての中空上昇下降の往復運動の一つであって、その点だけではぶらんこと似るが、しかしその実情はもちろん大きな違いがいくつもある。

ぶらんこは、まず孤独な遊び道具である。他人を必要としない。また、他人と一緒では半仙戯という特質を完全に失ってしまう。この十数年来、三人掛けの共同ベンチみたいなものをぶらんこ仕立てにしたものを、公園その他で、げんにわたしのいる団地などで、見かけるのだが、あれは宙吊りにした野外ソファであって、ぶらんこの仲間いりをさせないで、おぶらんこ、と称して話の外におく。また、これは正真正銘のぶらんこに、恋人同士などが二人で向かいあってのって、お互いに漕ぎあっているのがあるが、このときぶらんこはすでに性的スポーツの道具と化してしまっているのであって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.